

宗教心理学研究会ニューズレター

第19号 2013.10.10

宗教心理学研究会

Society for the study of psychology of religion

目次

特集:関西地区勉強会発足にあたり, 考えること, 期待すること	-----	1
宗教心理学研究会 関西地区勉強会への思いと参加へのお誘い	-----	中尾将大 2
これまでの関西地区における活動の経緯について	-----	辻本 耐 3
宗教心理学研究会関西地区勉強会に参加して	-----	太田俊明 4
関西地区勉強会に参加しての雑感	-----	松田茶茶 5
関西地区勉強会に参加して思ったこと, 感じたこと, そして期待すること	-----	中野美加 6
小さなコミュニケーションを育てるために	-----	木村 健 6
宗教心理学研究会への期待	-----	末田啓二 8
宗教心理学研究会 関西地区勉強会設立趣旨	-----	中尾将大 9
事務局からのお知らせ	-----	11

特集:関西地区勉強会発足にあたり, 考えること, 期待すること

2013年3月に関西地区勉強会が発足しました。宗教心理学研究会発足11年目という10年間を節目と考えると、新たなステージの1年目に関西地区勉強会が誕生したことになります。近年の宗教心理学への関心の高まりを思う時に、この勉強会発足もその趨勢の1つとして捉えることもできるのではないかと感じます。

今回のニューズレターでは、宗教心理学研究会の新たな活動として生まれたこの関西地区勉強会について取り上げ、宗教心理学の新たな空気を感じる機会になればと考え、「関西地区勉強会発足にあたり, 考えること, 期待すること」と題して特集記事を組むことにしました。

この勉強会の発足から関わるメンバー、参加して啓発を受けたメンバー、後進に対する温かい眼差しを持って見守っておられる先生等々、様々な会員の方々に執筆していただきました。また、最後に「関西地区勉強会設立趣旨」も掲載いたしました。

ぜひ関西地区勉強会に関わっている会員の方々が、この勉強会を通して、これからの宗教心理学をどのように考え、そして期待しているのかについてを知る機会となり、これらの事柄を共有することによって、この分野の発展にさらにつながっていくことができると願っております。

宗教心理学研究会 関西地区勉強会への思いと参加へのお誘い

中尾将大(大阪大谷大学)

2013 年の 3 月より、力量不足を承知の上で関西地区勉強会のお世話をさせていただくことになりました。これまで 2 回の勉強会を開催させていただきましたが、これもご参加いただいた先生方のご助力の賜物と感謝しております。私自身は「宗教学と心理学の境界領域」としての宗教心理学に身を投じたのが 2007 年でした。その間、この分野の研究を進める過程で苦労を重ねてまいりました。まず、学会発表をしましても、評価が真っ二つに分かれました。すなわち、「関心を示してくれる」か「全く反応がない」かのどちらかでした。しかし、私には確信がありました。宗教にまつわる行動や精神活動の研究はこれからの世の中に必要とされるだろうし、人間にとっては根源的な問題であると。

例えば「人生の目的」、「生きる意味」、また、「死の恐怖」などの問題については心理学だけではどうにも解決が難しい問題ではないでしょうか。普段、我々はそれらの問題に対して意識していないばかりでなく、確固たる答えを持ち合わせていないという人がほとんどではないでしょうか。かく言う私もその一人です。しかし、生きる上でこれらの問題は必ず我々の前に立ちはだかると思っています。「そんなこと考えても仕方ないさ、生きていうちが華、人生楽しまなきゃ損だ」と考える人もおられるかもしれません。それも一つの考え方だと思います。しかし、そのような考えで果たして先の問題群は解決されるでしょうか。

2011 年 3 月に我が国を襲った東日本大震災以後、そのような考え方では現代人は問題を解決できないほど、打ちのめされてしまったように思います。なぜなら、私が思うに、東日本大震災はこれまで現代人が築き上げてきた「価値観」や「人間存在の在り方」を根底から問うているように思うからです。科学技術や物理的な豊かさにより、現代人は快適で便利な生活を手にしましたが、ひとたび自然災害が発生するとそのようなものは芥子粒のように吹き飛ばされてしまいま

た。多くの方が自信を喪失することになったのではないかと思うのです。

これまでの私の研究成果から、「宗教」あるいは「宗教に関連する活動」には以下のような共通性があるように思いました。それは「人間の力や思議を超えた聖なる存在(神仏)を崇拜し、信仰し、翻って自分の力量のなさや至らなさ、愚かさを自覚し、祈りや瞑想などの手段を通じて聖なる存在と交流し、その過程で得た直観に従って生きる活動」ということです。これは近代科学の技術や知に基盤を置く、現代人の価値観にはない視点や活動ではないかと思えます。そもそも、人間の力や思議を超えた聖なる存在(神仏)が実存するかどうかは不明です。しかし、美しい自然の姿やその活動を観察したり、死など人間の力ではどうすることもできない現象と直面したりすることで「感じ取る」ことはできるのではないかと思えます。

ここでは科学を否定しているのではありません。科学的視点に偏っては世界のあるがままの姿(実相)は見えてこないと考えるのです。科学的に証明できないものは信じない、あるいは目をつぶるということがこれまでの視点ではないかと思えます。それでは科学的な物差しの許容範囲のものしか見ていないのではないかと。人生には科学では推し量れないものはたくさんあります。それらの問題に対処できるものこそ、私は宗教心理学ではないかと思っています。

関西地区勉強会の真の目的は、先に述べたような、人生にまつわる多くの問題に対して共に考え、学び、そして自分たちなりの回答を見出していくことだと思います。それは宗教心理学者としての私の出発点でもあるのです。関西には多くの宗教的土壌と遺産があります。それらの助けも借りながら、どこまで質の高い勉強会を維持できるかどうかは未知数です。しかし、上記の考えに共鳴してくださる多くの同志が現れて下さることを祈りつつ、小さな歩みを続けてまいりたいと思いま

す。今後ともどうぞ、ご指導・ご鞭撻のほど、よろしくお願い申し上げます。

これまでの関西地区における活動の経緯について

辻本 耐(大阪大学大学院)

先般、この研究会のメンバーが中心となって、『宗教心理学概論』が出版されたこと、科研費が採択され、研究グループが立ち上がったことを考えれば、宗教心理学という分野も徐々にではあるが、日本の学術分野において、浸透しつつあるように思える。しかし、我が国において、この分野に関する情報がまだまだ不足しているとともに、テーマを共有できる研究者も少ないというのが現状である。そのため、本研究の活動は、宗教心理学を志す者にとって、大変重要なものであることに間違いない。

本研究会の主な活動は、ニューズレターによる情報発信、日本心理学会におけるワークショップの開催である。加えて、過去数回にわたって公開講演会・シンポジウムが催されてきた。中でも、学会での活動や、研究会が独自に主催する発表の場は、同じ分野の研究者が実際に顔を合わせる貴重な機会である。しかし、こういった活動のほとんどが関東地区においてなされており、関西地区で行われたのは、3 回程度であった(宗教心理学研究会 HP 参照)。そのため、大阪在住の私にとって、この会の活動は、関西から遠く離れた関東の地で行われているという印象が常にあった。私事で恐縮であるが、私は僧侶として、寺の法務に追われているため、関西地区以外での活動に参加することが、なかなか難しい状況にある。そこで、予てより、私は、関西地区における、宗教心理学研究会の活動を切望していた。松島先生にお目にかかった際には、「関西地区でも宗教心理学研究会として、何か活動ができたらいいですね」というお話をよくさせていただいたのである。

そして、ようやく 2012 年 3 月に、第 3 回宗教心理学研究会のワーキンググループが、兵庫県神戸市において開催され、そこで関西地区での

活動について話し合いが行われた。ここで決められた主な方針として、開催期間を年に 3~4 回とすること、関東での輪読会との違いを出すために、会員による研究発表の場とすること、座学だけでなく宗教的環境に触れる機会を設けていくことなどが了承された。

それ以後、2012 年 6 月に兵庫県尼崎市にて第 1 回研究例会(発表者:中尾先生・横井先生)、同年 12 月に大阪市内(第 2 回以降は全て大阪市内)にて第 2 回研究例会(発表者:太田先生・松田先生)、2013 年 3 月に第 1 回勉強会(発表者:辻本)、同年 7 月には、会場となった教会の見学会と第 2 回勉強会(発表者:中野先生)が行われた。研究例会発足時においては、半ば見切り発進した感も否めないが、それでも、勉強会との形を変えながらも体裁を保ちつつ、着実に前進していると言ってよいだろう。

もちろん、これまでの研究例会、勉強会において、検討していかなければならない課題も出てきている。特に、出席者の顔ぶれが固定化しつつあることは大きな問題である。今後は、研究発表という形にとらわれず、宗教心理学に関する海外の書籍の輪読会、外部講師の招聘、共同研究の企画など、魅力的なコンテンツを提供できるよう、その内容について議論をしていく必要があるように思われる。

現在、中尾先生を中心に、私を含めた数人のメンバーで、関西地区の勉強会は運営されている。まだ発足して 1 年半足らずであるが、メンバーの間で、いろいろと紆余曲折があったのも事実である。しかし、話し合いを重ねながら、少しずつ、勉強会の方向性を修正していくことで、どうか、現在の状態にまでたどりつくことができた。そして、何よりも、関西地区において宗教心理学というテーマについて、議論できる場を維持できて

いることは喜ばしい限りである。こういった貴重な場を維持していくためにも、関西在住の先生方に

は、ご理解と、より一層のご協力を賜りたく、この場を借りてお願いする次第である。

宗教心理学研究会関西地区勉強会に参加して

太田俊明

【勉強会の現状】

現状関西地区勉強会は 7 ～ 8 人の小規模な集まりであり、近畿圏在住の参加者が多いことから、会場も阪神間を中心に開催されている。宗教心理学自体、分野自体の勃興を通じて徐々に広がりが出てきており、かつ専門内容は多岐に渡っている。このことに比例して、関西地区勉強会の参加者(本部事務局を除く)も研究分野的には心理学(特に社会心理学、発達心理学)・キリスト教神学・仏教学・浄土学・臨床心理学と多岐に渡っている。ゆえに小規模ながらバラエティ豊かなメンバーと言うことが出来るのではないだろうか。

また京阪神を中心にした近畿圏は宗教的な感覚が首都圏と比較して豊かかつ強く根付いているといわれる。そこから単なる研究会だけでなく宗教的資源を活用したワークショップ等の開催も考えられている。

【思ったこと・感じたこと】

基本的には勉強会なので、研究者を中心にして研究内容の発表を行い、専門分野の深化と知識の拡大を図ることを主としている。その上で、宗教心理学の特徴は机上の理論や統計、更には思想構造研究にとどまらず、宗教の現場に触れ、体感することを通じて客観性と主観性の涵養に勤めること。宗教者の立場からは理論的な視点の深化、宗教学者・心理学者の立場からは体験を通じた宗教的な体験の準拠枠化(経験)が必要ではないか。このことは常に感じている。

また、書記的な役割を通じて、宗教を中心として研究してきた者と心理学を中心に研究してきた者との知識的ギャップに驚きの連続である。ある時、「ひょっとしたら心理学サイドの方も宗教サイドの詳細な知識に関しては似たようなものかもし

れない」。ある方の発表を通じてそう思った場面があり、フォローしたことがあった。その時とは逆転した立場になってから、この感じが己心にとって重要なものになっている。正直、大学院およびその後にかウンセリング関係の科目を中心に取得したに過ぎない私にとって、統計法や生理心理学等の知識は多く無く、どの点を持って論理・法則が成立しているのか理解困難な場面が見られる。また私の性格からか、感覚的に書いてしまい、文章の論理・整合性が困難な時もある。その上体調を崩し易く遅延になりがちな状況であり、他の参加者や事務局等の力を借りつつ、お詫びしつつ何とか出来ている現状である。

宗教心理学と言う分野自体、複合的な学問であり、その「宗教」の枠組み自体、「東洋と西洋」「仏教とキリスト教と神道」それぞれで異なるものを感じる。近年、『宗教心理学概論』『仏教心理学キーワード事典』と言う二冊の書籍が発刊された。これらを見てみると宗教心理学と言う学問自体に拡散性と集合性のパラドックスを感じてやまない。と言うのは、『宗教心理学概論』発刊により、心理学サイドの一定の見解は出来つつあると思われるが、宗教サイドは『仏教心理学キーワード事典』を見る限り、宗教側を代表した宗教心理学ではなく、宗教単位での異なった見解による宗教心理学の見解が見られ、そこから統合性ではなく拡散性を感じる。それゆえに、宗教側からの宗教心理学に対する見解の差異と接点・焦点をどのように考えていくのか。その点が従来の宗教心理学の研究において欠けているように考えられる。そこで、宗教心理学のあり方について単に「仏教心理学」というレベルでなく、宗教教団レベルを超え多種多様な見解に基づき、展開する必要があると考えられる。その為には、小規模な集

団での話し合いと見解の出し合いを行うことが必要ではないか。

将来的には、このような規模の研究会・勉強会

が首都圏と関西だけでなく各地域に出来ればより研究進展するのではないだろうか。

関西地区勉強会に参加しての雑感

松田茶茶(関西保育福祉専門学校)

2012 年の夏に始まった関西地区研究例会から、名前を変え続く関西地区勉強会にもれなく参加してみようと思うことを、ただ思いつくままに書いてみます。本当に思いつくままです。まさに"雑感"以外の何ものでもありません。皆様の読まれるニューズレターの端っこを汚すことに恐縮を覚えています、と先に言い訳をしておいて、以下、雑記します。

2012 年 3 月に神戸の三宮にて第 3 回ワーキンググループが開催され、そこから同年 7 月に第 1 回研究例会が予定されました。しかしその第 1 回例会でなかなか適当な会場が決まらず、少々の交通の不便を我慢していただき、私の勤務先を使うことにしました。そのような由縁あって、何とはなしに"例会(勉強会)は必ず参加するもの"という感覚が芽生え、実際に全て出席しています。また、第 2 回例会では私自身の研究発表もさせていただきました(単なる構想レベルの内容でしたが…)。ただ、理想論的スポーツマンシップよろしく"参加することに意義あり"という、怠惰と言われても仕方のない心持ちで臨んできた感否めません。これは大変に失礼なことであり、私の極めて個人的な問題であって、この場に書くようなことではないことは承知しています。が、日々の学務と家内のことに忙殺されすぎて、"研究"へ向かうエネルギーのレベルが低下きっていた私には、勉強会に参加するだけでも必死でした。もちろん、参加すれば様々な好奇心が刺激され、新たなことへの興味が湧き、研究見聞への欲求が満たされる、と楽しいことづくめです。し

かし、懇親会も終わり日常へ戻った後、せっかくの諸先生との交流の内容をどれほど自分の血や肉にできたかという、顔を手で覆いたくなりませう。勉強会に出席するたびに"今の自分"を叱咤するのですが、どうも克己心が足りず、いつもの生活スタイルが維持されたままとってしまいます。

勉強会で発表される研究テーマは、"宗教心理学"という大きな傘の下でかなり多岐にわたっています。自分自身の研究興味に直結するテーマはもちろんながら、およそ離れていると思われるテーマの中にも、自身の研究のヒントとなるものがあちこちに散らばっているという、この当たり前のことをようやく先般 7 月の第 2 回勉強会で強く再認識しました。何をそんな当たり前のことを…と思われるでしょうが、私にとっては久しぶりの息つぎのようなものでした。きっと、開催場所が教会であったせいもあるのでしょうか(私自身は臨済宗の家ですが)。大いなる何かに包まれてしまいました。

さて、この原稿の執筆を中尾さんから依頼された際、"勉強会に参加して思ったこと、感じたこと、期待すること"とのテーマ提示をいただきましたが、私には期待することはありません。自己の欲求に従い研究を進め、この勉強会にてご指導やご助言をいただき、皆さんと懇親をはかる、というのは研究例会開始当初からの形として出来上がっています。私にはこれで充分ですから、強いて言えば、この会が永く続くことを期待しています。

関西地区勉強会に参加して思ったこと、感じたこと、そして期待すること 中野美加(同志社大学大学院)

さっさと梅雨が明けてしまい、例年よりも早く猛暑がやって来た 7 月初旬、2 回目の関西地区勉強会が、筆者の所属教会で開かれました。当日は、「我が家」にお客さんが来て下さるようなウキウキ感があり、同時に発表者でもあったので、ドキドキもしており、何とも言い表しようのない気持ちで迎えました。

発表では、皆さんがリラックスした空気を作ってくださったおかげで、とても楽しくプレゼンすることが出来ました。参加者が、発表の途中でもどんどん質問や意見を挟んできて下さり、発表者としてはとても発表しやすく、そのディスカッションの中で次の課題も、何となくですが神学と心理学の接点も見えてきたように思います。また、当日、「2 つ、3 つの学会で発表できるのでは」という示唆もいただき、ああ、学際的な場所に足を踏み入れているのだなという実感を、今更ながらもちました。どうかこれをまとめる力が筆者にありますように…。とにかく、この勉強会が始まってくれて心からありがたいなあと思いました。

当日、また後日に感じたことは、宗教心理学研究会のもつ暖かな感じの大阪版というか、研究会のおそらく真骨頂である風通しの良さの関西ヴァージョンだなあということです。まだ上手に言語化できないのですが、2 回目にしてすでにしっかりと関西地区勉強会の「空気感」が出来上がりつつあるような気がしています。

最後に期待することですが、いっぱいあるので

ですが、今、臨床の現場にいて切実に思うことを一つだけ書きます。それは一般の人へ宗教心理学の研究をわかりやすく広められないかなあということです。普通に礼拝に通ったり、座禅をくみに行ったり、写経に参加している人に対しても伝えたいと思いますが、どちらかという宗教への苦手感のある多くの人たちにこそ、宗教心理学研究の果実を伝えられたらいいなあと思っています。たとえば前々回の中尾さんの写経についての発表についても、一般の人に理解できることをどんどん紹介していけないものだろうかと思えます。

まず、「写経って怖くないよ」というところから入る必要性さえ感じます。もちろん同時に、宗教の中には気をつけなければいけない要素があることも伝えなければなりません。しかしそんな要素と比べ物にならないほどの宝物があることを、多くの人に伝えていかなければと思うのです。筆者は、福祉の現場で働く人たちに、先ず正しい知識を知ってもらいたいと思っています。彼らは宗教とあまり良い関係を結べなかった人を見すぎているためか、必要以上に警戒感を持っていることがあります。断酒会の会場にカトリック教会を使っても、教会自体は警戒する。自死遺族のための僧侶の会は様々な実績を持っているのに、紹介するのをためらうなどです。

普通の生活の隣に普通に宗教が存在する、ようにはならないものでしょうか。

小さなコミュニケーションを育てるために

木村 健(特定非営利活動法人 ratik)

研究・実践のみならず私たちの生活のいたるところに「グローバル化」という呪文がかけられて久しくなります。確かに、飛行機や新幹線に飛び乗り、インターネット回線を駆使し、母国語とは異なる言語を操って成立させたコミュニケーションから

得られるものは大きいと感じます。他方、気軽にバスや電車で揺られて辿り着いた会合で、馴染みのあるイントネーションを帯びた声を聴く経験は、身体にとっては楽なので、その分、より多くのリソースを知的活動に傾けることができそうです。

何より、直接会って話をする事から得られる情報は非常に重要なので、そうした機会を多大な負荷なく得られることは喜ばしいことです。

私たちが生身の身体を有して、この世界に実在している以上、関西地区勉強会のような「ローカル」なコミュニケーションの場は不可欠であると感じます。

よく言えば「アットホーム」ということにはなるのですが、「あまりにも少人数だな…」というのが初回会合に参加した率直な私の感想です。また、恐らく、今後、勉強会に毎度参加する人の顔ぶれも一定かたまってくるなかで、研究・実践にとって大切な「良い意味での批判精神」を会合内に確保していくことは至難の技であろうとも思います。

根本のところでは、宗教心理学研究会メンバーの総数が限られていること、さらに、そこに「関西開催」という制約をかけた際に生じる必然的な結果ではあるでしょう。

ただ、少子化・人口減少を大きなトレンドとする私たちの社会全般において、たとえ小規模であったとしても、実効性のあるコミュニケーションを確保していくことは、多くの場面に共通した課題になってくるだろう、と考えています。では、どのようにして…。

学術コミュニケーションが実効性をもつうえで、発信者／受信者間の最低限のやり取りが保たれていなければなりません。この一定量の「流れ」を確保するために、研究者・実践者がごく限られた分野内で「グローバル」に連携していく方法があります。「ローカル」にみた場合にはごく少人数でも、世界規模で眺めた場合、関係者は数多く居るのかもしれませんが。他方、場としては「ローカル」なまま留まり、分野・領域の裾野をより広げ、参画する人の数を増やす方法も考えられるでしょう。関西地区勉強会の「これから」を見据えるうえで、私は後者に可能性を見だしていきたいと考

えています。

私事で恐縮ですが、2013年5月に学術専門書を電子書籍で企画・編集・制作・販売する出版事業をメインに行うNPO法人を立ち上げました（<http://ratik.org>）。これから哲学、心理学をはじめ「心」を巡る研究・実践に関わる学術コミュニケーションの活性化を目指し、法人としての活動を展開していく所存です。情報発信のための1つのチャンネルとして、ratikを念頭に置いていただけますと幸いです。失業から事業立ち上げにいたる経緯のなかで、「勉強会」の前身である「関西地区研究例会」には結局一度も参加することが叶いませんでした。しかし、今後は、自らの研鑽に加え、宗教心理学研究会の発展も視野に、勉強会のことを考えていきたいと思っています。

当法人にとって、現時点・設立直後の限られた予算では遠方まで出掛けて情報収集することができません。しかし、具体的に事業着手して感激したのは、関西に範囲を限定しても、注目に値する各種の小規模学会・研究会が日々、細々ではあるけれども多数開催されていることでした。

元々、宗教心理学研究会自体が、多様なバックグラウンドをもつメンバーの集まりではありません。また、研究会の内部に良い意味で「他流試合、大歓迎」の雰囲気があることは大きなメリットだと感じます。ここ関西では、さらに、その方向性を推し進め、勉強会の会合の或る回には、他の学会・研究会と合同開催を企てるなど、「他流試合の促進」をテーマに掲げてみてはどうでしょうか。恐らく、研究会メンバーの方々は、それぞれのご専門分野で「宗教心理学研究会以外」のご所属のコミュニティをお持ちであろうと思います。

関西地区勉強会が、学術的な価値の高いものになっていくことを、何よりも「発表すること」「参加すること」で得られるものの多い会合となっていくことを、私は心から願っています。

宗教心理学研究会への期待

末田啓二(神戸親和女子大学)

宗教心理学研究会の活動が年々活発化し、活動領域も広がっていくようで、今後の発展が楽しみです。私自身、直接的にはほとんど活動に加わってはおりませんが、若い研究者の意気込みや活動をそばで拝見しているだけで、熱気が伝わり何かしら心に迫るものがあり、声援を送りたくなります。関西地区勉強会も発足以来、コアになる人たちに恵まれてますます力強い歩みとなることでしょう。

私が宗教心理学研究会に入会したきっかけは、赴任した大学の一般教養科目に「宗教と人生」が開設されており、私が担当することになったがためでした。宗教についての知識などは皆無に近い中、これまでの心理学関係の学習とは比較にならない位に必死で勉強した記憶があります。幸いにも意外と学生の反応がよく、大学の教養らしい授業ができたと自負しています。学生の関心も含め、最近では心理学界がスピリチュアリティ(宗教性、霊性)を取り上げ始めたのは当然のことでしょう。宗教や宗教性は人間の根源的心性から発していると言えます。宗教心理が人間の心理の核心部分にあり、人間存在に不可欠な役割を果たしていることは歴史が示しています。どれほど科学が進歩しても、またどれだけ権力によって弾圧されても存在し続けてきたのが宗教です。

ところでこれまで宗教心理学研究会で取り上げられてきたテーマや内容を見ますと、多くは既存の宗教、中でも仏教やキリスト教など、いわゆる創唱宗教と言われ、教義と教団(組織)、教祖が存在する宗教と、その集団・個人との関係に焦点が当てられてきたとの印象を持っています。私自身もクリスチャンで、信仰に至った過程、祈りや儀式、信仰集団との関係などに関心がありますが、宗教心理学では宗教そのものの原点を探ることにより、個々人の宗教的心情や信仰の発生と発達が見えてくるように思います。私が現在関心あるテーマがアニミズム心性の発達変化に

ついてです。特に日本文化は自然信仰(山岳信仰に起源をもつ神道など)の色彩が強く、アニミズム心性が生涯にわたって強く反映していると考えられます。日本における宗教心理学研究の独自性はこのような視点から生まれるかもしれませんが。C.Darwin の "The Origin of Species" ならぬ "The Origin of Religions" の心理学研究が宗教心理学の基礎部分に該当するかもしれませんが。宗教心理学は学際的研究ですから、扱うテーマや対象は無限です。しかも心理学の多くの分野の研究手法やパラダイムが援用できるでしょう。私も来年度いっばいで定年を迎え、研究活動は大きく減少します。したがって今後このような研究が発展すればいいなという願いから、以下に関西地区勉強会への要望という形で、ご提案させていただきます。

①関西地区という地理的・歴史・文化的特徴を活かした研究テーマを

関西は歴史が古く、宗教に関しても熊野信仰からお伊勢参り、奈良・京都の仏教、さらにキリスト教まで、融合こそしていませんが、渾然と存在し、しかも深刻な対立関係にはなっていません。しかも日本人の多くは儀式や慣習レベルとは言え、仏教や神社神道、キリスト教などへの重複した関与が認められます。日本人の宗教的態度の寛容さなのか、いい加減さなのかは判然としませんが、世界の宗教事情を考えると(たとえば文明の衝突にみられる宗教対立など)、日本の宗教の特異さというか、特長というか、今後の世界の宗教のあり方や役割を議論する上で、1つのモデルとなるかもしれません。

②フィールドワークの重視を

心理学研究では Evidence based が重視される今日、形而上学的な論述に終始しては学術界からはなかなか認めてもらえません。科学研究にしても最後はデータを提示することが求めら

れます。

③ ②の課題を踏まえますと上述したアニミズム研究や、ポジティブ心理学の観点に立った "positive focus 面接の well-being への影響"

(末田ら, 2012, 科学研究)などは, 宗教の役割を論じる上で, 実証的研究として比較的取り組みやすいテーマと言えます。関心ある方は末田までご一報ください。

宗教心理学研究会 関西地区勉強会設立趣旨

発起人: 中尾将大(大阪大谷大学)

研究会事務局: 松島公望(東京大学)

はじめに

宗教と心理学の接点, 周辺分野の振興を目指して, 宗教心理学研究会が設立されたのが今から 10 年前の 2003 年であった。その後, 研究会は発起人の松島公望氏が中心となり, 今日まで発展してきた。これまで毎年, 日本心理学会で研究発表会がワークショップという形で開催され, 年を追うごとに参加者が増加し, 盛会の一途をたどっている。その他, 一般向けの公開シンポジウム, 講演会なども開催され, いずれも成功裡に終わっていることは会員諸氏のご存じのとおりである。その他, 現在進行中のプロジェクトと合わせると二回にわたり, 科学研究費補助金による研究プロジェクトを実施し, 成果をあげつつある。今や宗教心理学研究会は我が国における宗教心理学の発信源, 基地としての役割を担いつつあるといっても過言ではない。

そのような流れを受け, 昨年 3 月に関西でも宗教心理学および周辺分野の振興を目指して, 「関西地区研究例会」の設立が宣言された。以来, 都合二回にわたり研究例会が開催された。

しかし, 当初, メンバーによる研究報告を中心に展開できると考えていたが, 予想以上にそのことを継続的に展開していくことが困難であった。また, 最初に世話人を引き受けて下さった辻本耐氏が非常にご多忙を極めており, 実質的に研究例会の運営を行っていくことが困難になってしまった。これらの状況を受けて, 改めて中尾が関西地区の世話人を引き継ぎ, これまでよりも規模を小さくして, 再度, 「勉強会」の形で再開していくこ

ととした。

1. 本勉強会の目的

宗教および心理学の研究活動, 勉強会活動を通じて, 宗教心理学という分野の振興と発展を目指して, 関西からの情報発信をおこなってゆくことを目的とする。さらにその成果を世に発表することで, ささやかでも混迷極める現代社会を生きる現代人に精神的安らぎを与えること, 幸福になるためのヒントを提供できることを究極の目的とするものである。

2. 会の活動内容

主に [A] 講演会, [B] 発表会, [C] 実践企画の 3 つに大別される(毎年 3 月から開始し, おおよそ 3 か月ごとの開催を想定している)。

[A] 講演会

宗教心理学を基軸に, 第一線で活躍される先生方にご講演をしていただく。質疑応答やディスカッションの時間も設け, 直接, 講師との交流を通じて学びを深めてゆきたい。

* 主な関連分野として・・・宗教学, 哲学, 仏教学, 神学, 医療, 福祉, 看護, 介護, 社会学, 老年学, 教育学, 死生学, カウンセリング, ターミナルケアなど

[B] 発表会

主に勉強会の参加者を中心に, 発表会を行う。内容は発表者個人の研究テーマに沿ったものや, 上記関連分野における書籍や論文の内容発表でもよい。文献は日本語のもの, 英語のもの

でもよい。ただし、発表者は基本的にレジュメを作成しての発表としてもらいたい。レジュメもできる限り「詳細」に作成していただくことが望ましい。発表後に参加者同士のディスカッションをおこなう時間をとり、議論を重視したい。

[C] 実践企画

関西は京都・奈良という宗教都市を持ち、土地柄、宗教的風土を色濃く残している。勉強は頭で考えるだけでなく、体験から学ぶことも多いはずである。また、「よく学び、よく遊べ」という格言もあるごとく、時折、外に出て宗教的な文化や風土に触れることで学びの一端としたい。主な活動として、写経会や座禅会への参加、京都・奈良の神社仏閣めぐりなどを考えている。また、このような企画を通して勉強会の参加者同士の親睦も深まることを期待している。

* 参加者は宗教心理学研究会の会員に限らず、周囲の興味ある方々にもお声をおかけいただければ幸いである。

3. 勉強会世話人

発起人の一人、中尾が務めることとする。そして、研究会事務局の松島公望氏に後方支援をお願いし、すでに承諾を得ている。さらに、本勉強会に賛同してくださるメンバー数人にお手伝いをお願いすることもご了承いただきたい。

会の開催時期や情報は、会員の方全員に活動状況を知っていただきたいの思いから、当面、宗教心理学研究会のメーリングリスト(ML)を通じて発信する。また、宗教心理学研究会のニューズレターに「コラム: 関西勉強会だより」という

見出しで活動内容を掲載してゆく予定である。

4. 開催場所

差し当たり、講演会は大阪や京都の一般施設を借りて開催してゆく。宗教心理学研究会の会員の方でご自身の本務校の施設を提供してもよいという方がいらっしゃれば随時、世話人までご一報いただきたい。

発表会も同様にメンバーの方で場所を提供してくださる方があればお願いしたいが、ない場合は世話人の知り合いの京都にあるミッション系スクールの幼稚園、世話人が檀家をしている浄土宗寺院などで開催する予定である。

実践企画については日時と場所をMLにてご案内し、集合場所を決めて団体で行動することにした。

* 以下に世話人のメールアドレスを掲載する。連絡は以下のアドレスにお送りいただきたい。(できる限り、迅速に対応したいと考えていることから、両方にご送付いただきたくようお願い申し上げます)

関西勉強会世話人 中尾将大

aacci700@kcat.zaq.ne.jp

mnakaotear@yahoo.co.jp

5. 寄付について

本勉強会の活動のために使用することでお受けしたい。管理は宗教心理学研究会事務局が行うものとする。

事務局からのお知らせ

宗教心理学研究会ニューズレター第 19 号が発行されました。今回の内容は、「関西地区勉強会」に参加している会員の方々にそれぞれの思いや考えていることを執筆していただきました。まだまだ小さな活動かもしれませんが、この宗教心理学研究会が発足した頃の活動はもっと小さく頼りないものでありました。しかし、その後、この研究会を起点として、心理学の立場から 60 年ぶりに刊行した「宗教心理学概論」、2005 年度、2012 年度における 2 つの科研費研究プロジェクト等々、現在ではその活動は多岐にわたっております。

この関西地区勉強会も、関西を起点として、これまでとは異なる宗教心理学における発信を行っていく場として展開していくことができればとの思いが今回のニューズレターの記事に詰まっているように思いました。

ニューズレターを始め、これからも研究会に対する会員の皆さまからのご意見、ご感想をお待ちしております。(K.M)

[宗教心理学研究会の今後の予定]

2013 年 10 月 19 日(土)

第 2 回研究会開催 時間: 14:00 ~ 17:00 会場: 東京大学駒場学生相談所

2013 年 11 月 30 日(土)

第 3 回関西地区勉強会開催 時間: 14:00 ~ 17:00 (予定)

会場: 真宗大谷派 難波別院(北 1 階ホール)

発行: 宗教心理学研究会

編集: 宗教心理学研究会事務局

研究会事務局

担当: 松島公望 [psychology-religion@office.so-net.ne.jp]

研究会ホームページ管理・運営

担当: 横井桃子 [psych.religion.web@gmail.com]

研究会ホームページ

http://www.geocities.jp/psychology_of_religion_japan/